狩衣目錄

狭衣日録 並 年序

巻第一之上

狭衣

三月さ夜大将花一枝あるをて源氏をゝすてまつらせ給ふ

○塔川の関白殿の屋敷より方三人まゐらせ給ふ

○さ夜十八戈典侍義さぶらいをゝす

五月四日狭衣大将宮の御部屋を出給ふ

なをて奇うをゝすらるゝ

ひとりく琴笛ぶもまて城つゝ

五日内裏へ大将の外出ゆるす

天皇西子あまたぐ

ゝたるり狭衣をとりて天皇に献ぜ給ふ

六月ゝ宮をあくあけ月見ひとつゝ源氏をゝ大将まいり給へば

狭衣ゝ宮を源氏をゝ大将まいり給へ

九曜文庫

○堀川殿へ大納言まうでたまひ次に母宮へまうでたまひ
て○中宮と一所にしたまひ○堀川殿は里へ出給ふ○里宮へま
うでて大納言まうでたまひ○二条殿大宮
まで半にて大納言おりたまふ元八歳号中
納言殿仁和寺に威儀師ひめ君ぬすみゆくとたづねん
とて御ひとり女の宿へとりたまふ○堀川大納言のもとひ
と行おりくあるべしといつもしまに数を尖りたりそれ和
大納言まりそ整り給ふ

巻第一之下

七月大文と源氏宮と碁うちたまふ大納言参りて殿上にて
○大殿の少将洞院上六今姫君にもとめ給ふ

○大納言殿の中将君二十きさきにたてまつ
りたまふ○今姫君二十きさきにたてまつ
りたまふ○親議ちる女房をもとめ給て母代
とす○俊親しるる女仕をもとめ給て母代
九月侍従まうまとに二位中将ちるる中納言ふちりあり
○さ夜今姫君の宿へ初て行給ふ母代又わる美女房たち乃
ようめ行儀ハさハがしき様乃ふ○大納のふ通成殿号
井のひめ君乳母よ約して姫君筑紫へ御ゆく
用意さも○暁の門出に通成むかへ車とやる宿ふ
あるそゆく備前の唐御ゆて為ちる給ふ

巻第二之上

あて殿号井姫君のゆく筑紫大納言まうでたまひ給ふ

正月 さ衣の中納言大納言よりたてまつり給へる
○大原勅をうけ給はりて大納言女二宮をおもてのぶ給へる
○さ衣弘徽殿に参給へり女二宮に舎人やうの者
を姫めり○女二宮乃母大宮あけぐれ給へるのあしこころ
紙筆女二宮のそばにをとこ歌をよみ給へり
○大納言女二宮に給へる暁の中宮のうへゆきて歌を
うゝ姫御の文をとりきこえ給へり○中納言の使朝の文
を女二宮へたてまつる
三月 女二宮 悪阻ゆゑ里へ給へり
異説 女二の乳母ゝ紙筆を給て姫と云給へり
○父帝 女二宮のもとへひとをたまひてわゝ宮を給へり

○女二宮のもとへ参給へ里へ給へり母大宮
○大宮四月五六日女二宮乃姫御ゝ紙くして母大宮の
懐姫と奏す
十月 女宮誕生あり大宮の御産と奏す○帝ゝ
はゝうへ乃御産の御祝あり

巻第二之下

十二月 四月大原宮の女二宮御産して七日よりてうれ給へ
○女二宮八我ゆへ母宮古歌をよみ給へるゆゑにて
づゝいふことをして尼ゝなり給へり大納言女二宮の尼ゝなり給へ
ゝ八我ゆへ給へり○宮の御源氏乃巻ゝ
ゝ宮心ゝ紙筆ゝ給へり○宮の御ゝ紙筆給へり

按ずるに義経の父を源氏義朝と云ふ源氏義朝の父を為義と云ふ

正月式部の大夫為義卒す

義の卒するの日扇を開かざるに依りて

時人称ずるなり

帝の御事

夏比 帝思召しに依りて

○帝 世俗に申さるるに

七月 帝まします

○帝 ゆきとらを

ゆきとらを

八月十四日に清盛の使

○今又義経清盛の

即位ありて後

○さがれ

○通

九月 毎日 源氏義朝の

○一条

○宮大路

給ひて新宮おつとさだめられ一家流の一巻を授給
○一条流これ給ひしく今源氏の家に秘流よりあり
ごさ神記大夢すも源氏ゆを告あり
三月ゑくらひ三河守ゆ家に秘流よりあり源氏の家つ
ゑひ給ふ○秘流みくしもに川よはをゑしに出給ふ大和殿
内侍し宮殿大宮に秘流ごちにあり給ふ○女二条秘
ゑり立給ふ
十一月大和家月十余日にゑる野さんへまいり給ふ
○能名井水者の見八乃々さ用の山邪よゑ給にて逢ゑ八
長へ居るが水宮に奥して上家まる殿よ妹の能名井北姫者
よあひて夜ゑ乃に主侍の家きよ給て氏三三年給ふつと大和

殿より給て妹の為紙ゑ書ゑれ八部安もゑだやりし給
ゑと云ゑくゑ八部川のゑ一三の巻ゑ見ゑゑ

巻中三之上

○大和殿宮殿ト申逢の殿上人ちどあり
吉野川のあにて弟ゑ若人あり○山邪のゆゑく能名井
姫者のゑゑひもゑ給ふ○女三宮八二巻に秘流に宮ゑ今
つゑくゑゑゑ給ひ八一番宮八ゑくちにて宮ゑ地さし
きこされも新秘流の女宮とひらゑ給ふ○雷侍ゑ夕
つゑ大和一条ゑ宮ゑ大和桜上ゑ能名井城にて吹
給ふ氏時為宮三ゑ○大和入道宮ゑ文ゑ宮ゑ給ふ彼入間給
也○今姫者姫ゑ宮ゑ給ふ氏時二十宮ゑ

○東院上今姫君後つづき門まつりとりおこなひ給ふ

二月 花櫻の盛今姫君の御うつくしにとてたかき殿上のまへとうえたまふ○今姫君の御方の女房ども引出物あり

○今姫君に躍兒とひろめたまふ○母代の乳名弁姫君八年中納言の娘にて今姫君の母めいちはしをたかき殿へ

○たかき常盤へ高ゆきて移門おてあひ給ひ山外にあひ給ふ

○常盤尾云たかきの姫君十九日ひとり

うまれきたりたまひて百日のお祝ひ

さる程八月廿三日○二月に今姫君の内まいりの

る東院上の又大殿たかき殿へ内姫君入内

とう秋御所上の野宴和中納言ひて夫婦とたち給ふ

母代さつきて出母上つづき又中納言殿へ

巻第三之中

したる朝ぼらけ西ひろまりとおもへさに乳名弁姫君の服姫

ひもめ見給ひ式部丞一条の一所の所へ西ひて立ちの

給ふと大殿の君子紙云尺匂給ひて大殿のう

らひ給ひて立給ひ世にうれしきこと

堀門殿一条の大めたまふ大殿ひきあ給ふべりしと云ひて女院

へと帝へと奏して大殿のおとうとの給ふ

六月八条ゆりわく文集して大殿ひ給ひ給ふ

○東殿の大わちでこを一条ありて嫌院の入内

へなりけるよし大納の卿申しまり

八月十日ホ一ホ文ハ大納の御方よりおくり給ふ一ホ文ハ三千石
大納ハ廿一ヶ所をもて九ヶ所○中納言の御方を軽々しく清涼殿の人
道長公ハ女なりて一ホ文を御方にしあるべきをつゐやとし
給ふ人○縁の御文ハ一の姫君の文を中納言
殿ハ也なり○大殿御文ハ一ホ文ハ一ヶ所にて大納と一ホ文ハ二ヶ所にて
入給ふ大納まづ取りて一ホ文の文ハ入給ふ後
朝の文ハ一ヶ所にて清涼殿の人道長公ハ御ずり給ふ使ハ六条府
の尉し○ひるつくる者院今こゝにおきたるにしのことする
と障る孔穴うり大納の宮腹の女
ゑゑのおとゝとあり宮ハ也と障子をかあるて女童

たち大納をのぞく時大納ひめ君張りつきて わづまへゆきぬる
○ほそれぐ御と大納の姫君のるをひらうち給ふを中將
とりて女童一ホ文をみるるきて ハ別南北なるの御方のむきあと
やしがさにくハ大納の姫まて ゆへよけわろ人大
納ハ見るり給ふとん給ふ給ふ
十一月 ゑゑの法禊着ハ夜の時し大殿つそび給ふ法つゐてに
まさりのつそぶして姫君にはさる屋きやだやと一ホ文へ
大納の御方姫君ハ七ヶ所○女院まて姫君のもる母大殿ら
里てきもなり給ふ一なにたる殿御のこゝゆひ給
ともあり大納もあるべきゆゑ御ひりてちゝ給ふ
ゑゑハ文の法とめてでるゝ帝北面の中の

ちゝ母ぎし

巻第三之下

十二月廿四日あしたの日かゝる
よ札帳あげゝて女房
熱のはてゝ
四月廿日ことし八女院
ちゝはゝかゝる大えの
ゝひまゝ
四月廿六日乃雲とゝ八
む○みぎ元の日大原御
紛参れ車八例ちゝ

四月廿八日○清涼院の
て八月弘徽殿と申の西一面
○弘徽殿分りちゝて三
○えの中おまゝりたへ八
九月清涼院の今えはた
四月廿六日とわゝえ
ゝえよ入道えの持佛
八月廿七日ゝの年ぢの
ゝうてやうて又入道え
十月廿女院のあや金乃
ゝまゝ地乃ぎゝ

でんとて曉より出給ひしかとその書つるを女院へまいらせ給へ
大納の母上も聖うして女院より契れとひらせてきこえ給へ
母上の須佐神の氏はかりもきこえ義ふかく給へ給へ
大納も精進みて虔山より七日斗こりゐてかきんせさせ
給へとその給へ○大納の女院のうへゆき契りのよと二つゐ引給へ
仙遊寺殿也神感ふかくて神殿ふかくびまり異香薫じ
○大納一条院の女院に心をとゝせ給へをなんまひて曉ま
りてひえの山へのぼりゐさんとて父母よりいとまこひ契
の女院もりの一条へくりえをまりあひて世にのがれ
給へとひ給へり

巻第四之上

○東北の賀茂の神義の神ありて大納郎位をまゐり給
ふ文大納の聖をかよの作殿じ給へ○大度賀茂の神
義の岩ゐりて大納の通世を前給へ○大納度賀茂給
し給○大納義を奥し渓鐵院へまりて又入給へ
へとひまへ○院の女御八渓鐵帝北女一ゐ堀川度へ出給ひ
源氏文の給へ位給へ
三月 賀茂義女院の花盛より院の女御と女院と文ゐ給
給へ○大度四事ゐ院の女御乃ゐへゐ給ひ帝北
ゐ給へ○女院八独事ゐとあり又ゐ
独事とゐ給へ○大納堀川度の摘とゐて賀茂の女院へ
ゐ給へ○入度文独事ゐあり○大納堀川度息北文独文独

院の別當となり　中納言のゆゑなき事おもはると
なるは　新中納言の御ゆゑなり　世をけうがりてなん
と　引あをびはしたる　撥人　うちはしたるに　故式部の
うへまで　式部の　ゆゑ　式部卿宮の姫君　琴　ことはしたる時
うちて　後　式部卿宮の姫君　琴　ことはしたる時
式部の　ゆゑ　八月十日ばかりの　服　にうちはしたる　義人　事
おもはるの　母　ものつかひて　敦仁　納言の姫　母　院　仰らる
とて　ものたにはしたる　まされたるの　月　つゐ〇　事おもはる
の　姫　ゆゑ　久やうはしたる
四月　院の　母　八條　殿の　女　ゆゑ　四　まうはしたる　弘徽殿　ゆゑ
はしたる　今の　ひめ宮　をうみはしたる　ゆゑ　后　まうはしたる　黒　姫
八月〇　春宮の　母　姫　殿の　女　ゆゑ　后　まうはしたる

七月　今の　中宮　女　入内
八月　大納言　女の　ほ　春宮　女　式部の　姫君　つぼね　女
六月　故式部の　女の　上　やうはしたる
七月　ものの　き　姫　式部の　女の　上　北　まうはしたる　尼　まうはしたる

巻第四之中

九月　故式部の　女　上　尼　まうはしたる
つぼね　大納言　殿　ひ　亀山　のと　知心　寺へ
問はしたる　野の　えさ　やうし　尼　と　寺　うんクワ　寺へ
うちうち　入て　姫君　ま　地つひ　はしたる　乳母　つ　人　中の　西　北
て　月　八　姫　殿の　源氏　女　つ　仰　大納言　家　ありて
うちうち　はしたる　八　兵　尼　つぼね　ひ　おもと　つ　送　礼　白

寛和中納言行成卿の女を出家し給へる時の歌

○後一条院の内侍の女房の新造へ遣はしける

十二月寛和中納言の乳母の所へ遣はしける

○大納言実房の息女に吉日に寛和のつとめを行はせ給ふ

小式部内侍の母の歌

君を源氏の文とやとひて大納言の所へ遣はしける

つぐきの乳母の歌

正月十五日小女房に粥つくりてとらせたりける

乳母男子をうむのつとめしるしとて

うつり出でたるのうつりに遣はす

巻第四之下

○あのうの法世中さはがしくなりぬるのち○帝にたちまちに

を譲り位を女王に一世源氏とゆづりん歌この時

○父帝の一条院へ参りあはせ給ひんの宮まちあぬ○天慶

祈あはれ出でたる時に位ゆづり給へとの時に

院うちの内へもたちまへものの時に又帝にたちまも言あ

り歌に帝に位ゆづりて八月に国ゆづりたる後へと宣旨

○あつき夕暮に人のもとに

のうり給ひて二度位ゆづりんあるまでとき名あり

八月帝の位ゆづりて出家し給ひて

てきて八月廿日に国儀し大原関白をハたたき奉りて
ゐたまふ帝の位よりぐまをとて堀川院とぞ申奉る
母の母女ハ皇太后宮とも申○一説ニハ四条の
てんくとゝ申して内裏にハ姫君を乳母そなくもて
せ給ふ弘徽殿ふみ給ふ○姫君姙てもやもゝげみて
里まゐ給ふ入内ま〻○殿上のわらはを殺ハ殺〻
て寺あり又勅答あり○女の姫君ハ今ハ女の女院と申さり
十月 女の女院入内花夢と申の内
十一月 女院まうでゝ給ふ
永年四月 年ゝ〻てゝもゝ忍ぶ御ぶにハ後のゐせんの位定させ給ふ
毎院へ扈ども帝ゝ〻なすもせ給ふ○堀川院ハて芳夢女

法男院ゝ〻みゐ給ふ○姫君姫君服の女君を一説ハ
給ふ今上と奇ゝ〻ゝ給ふ○ふぶや十月ゝ〻ゝ内裏
へ行幸ありゝ男院ゝ〻ゝ給ふ○ふぶや十月ゝ〻ゝ内裏
也○一説ニハ皇太ゝ〻ゝ〻ゝ尼ゝ〻ゝ給ふそやぞく
永年 ○女の女院 后ゝ〻ゝ給ふ
九月 又のゝ〻ゝ姫ゝ〻ゝ大原ゝ〻ゝ
九月八賀茂の行幸 毎日 平野ゝ〻ゝ行幸あり
十月十日平野行幸○ふぶの法元服の時今上の一宮とあ
らせられゝ親王井姫君服の弘徽殿の姫君と法蔵菊
あゝて一説ニハ今上の二宮の法ゝ〻ゝ今ゝ〻ゝ法年
二ゝ法母ハ式子内の姫君ゝ今の御ゝ今上の一の女

とあるまれなるもの也と二の宮と申さるゝ○その宮は光服あげ
まさりの物をいつくしつゝ焼滅ぼし申し也ける也
宮とまし父帝と礼をなんは宮に義しなる人なる人へ母の
礼をしたまりける人なりてもむき宮と所をの所をもあれ
也今上の御びてつをなるなるなるなる人なる人なる人○今姫
君のすぐやもちりける中和中納言の大納言の大納言
文大臣のけるあり○むしめ武蔵なるなるなるなるなるなるなる
奏しける人○姫君の文八相撲ふ和尚ふ和尚ふ和尚
也ものみをもせて出墨八坊門殿中てもく薄衣の宮
もてる部より出る也ける人○中宮は志ありて殿ひ三条殿
より出る也ける時八坊門殿○常盤尼死去殿より殿香殿の

姫君のうるはしく出し給ふ姫君のうづきあるもとのさう少唐櫛
を殿のの小宮あるよわるして姫君の心ちなる時ん也
まとといひしと宮中九月ありてまつり今上と姫君へ入也
なる○焼滅院の宮や義一宮流の長ゝ文歌給ふ
八月　又のもとれ八月稲月殿の殿に石蔵の殿に石蔵
行幸あり今宮文も中れなぐその障子をとつれまつ

一薄衣の年序八のまれ八月ありまそのゆあり二年
き同しき年れまるまて二ヶ年は長殿にて八月より
殿滅院ものとかきあるまし御月二の宮出て
位をつる也ける也てる治世二十年とあり此時後一条殿より

位をゆづりおはしますこの年九月十日崩ぜ給ふ
[illegible]
[illegible]
年をへてこの天皇まで位にをりゐ給ふ
[illegible]
二条小路殿にあらせ給ひ世を[illegible]
とある夜[illegible]
[illegible]
切臨抄之

東京黄金山釋